

# 名古屋市近郊でモロヘイヤの産地作り ～食と農と人をつなぐ～

大治町 丹羽幸政さん  
野菜（モロヘイヤ等）

【平成27年7月21日掲載】

大治町にてモロヘイヤやホウレンソウを生産している丹羽幸政さんをご紹介します。板前から転職した経歴を活かして、食と農業をつなぐ地域活動にも尽力するとともに、モロヘイヤ部会の部会長として、部会員へも市場へも妥協せず農業に取り組んでいる方です。

## 就農時の状況

名古屋で板前として働いた丹羽さんですが、ご家族の事情により家業を継ぐため大治町に帰ってきました。就農当時は、父の手伝いで接ぎ木栽培のキュウリやダイコンを栽培しながら、葉ネギやコマツナなど新しい品目にもいろいろと挑戦していたそうです。板前からの転職で、苦労はなかったかと聞いたところ、新しいことを覚え、農業で生計を立てるために毎日必死だったので気にならなかったと話されていました。



丹羽幸政さん

## モロヘイヤの産地を作る！

大治町では名古屋市近郊である地の利を活かし、以前から赤じそやホウレンソウなど鮮度が重要な葉物野菜が栽培されていました。丹羽さんは、その葉物野菜のラインナップを増やすことのできるモロヘイヤに着目し、平成8年ごろ、地域の人たちにも種を分けて栽培を始めました。モロヘイヤは1袋100gと軽い上、一度播種したら4か月程度収穫し続けることができます。高齢化の進む地域においても栽培及び収穫が比較的容易な品目として、栽培面積は広がっていきました。

しかし、他にもライバル産地がたくさん存在し、8月盆前後の出荷が集中する時期に価格が低迷するなど、収益を得るために苦戦します。丹羽さんたち部会員は、消費者がモロヘイヤの食べ方を知らないことが一因と考え、名古屋の市場に食べ方を紹介したり、料理の写真を送ったりして、需要拡大に取り組んでいきました。また、出荷や流通に関しても、商品を入れる袋の接着部分が破れやすかったため、袋業者に交渉して破れにくい袋を導入したり、出荷用ダンボール箱を20袋入り正方形から30袋入り長方形に変更し、積み上げて輸送した際に荷崩れしないよう工夫したりと、農家が業者と直接やり取りしながら問題を一つ一つ解決していきました。



破れにくく作業性の高い袋を使用して出荷

## 産地「大治」の特徴を追及

他のライバル産地に対抗するため、丹羽さんは部会員と一緒に、大治町の産地の特徴をいかに出すかを追求していきます。大治町のモロヘイヤ部会は露地のみで栽培しており、ハウス栽培よりも葉色が濃く、つややかなモロヘイヤが育ちます。露地であるため、害虫の防除に手間がかかりますが、フェロモン剤の利用などにより作業面での省力性も追及しています。

また、モロヘイヤは葉を食べる野菜という印象がありますが、丹羽さんは板前時代の経験から、袋の中に入っている全てが食べられるものでなければならないという信念がありました。そこで、草丈を伸ばさせて上部のみを商品とし、茎まで軟らかく、全て食べられる状態で出荷しています。

さらに、「水切り」という作業を取り入れ、収穫後のモロヘイヤを水にくぐらし、水分をある程度除いて（水を切って）から袋に入れます。部会員全員が適度な水分状態に「水切り」できるようになるには、様々な失敗や苦労があったそうです。

これらの技術と努力によって、葉色が濃く、茎まで軟らかく、水々しいことが大治町のモロヘイヤの特徴となっています。



4月播種のモロヘイヤを収穫する様子

## 部会員にも妥協しない

大治町農業振興会のモロヘイヤ部会には約40人の部会員がいます。平成10年から部会長を務めている丹羽さんには、部会員をとりまとめ、産地の将来を見据えて取り組むという重要な役割があります。その秘訣を聞いたところ、「妥協しないこと」という答えが返ってきました。慣れ合うと状況は悪くなる一方なので、決まりごとは守るという姿勢を明確に示しているとのことでした。例えば、出荷物の調製不足に対して市場から改善の要望があった場合、市場には「値段を付けなくてくれ」と伝えるそうです。「そうすれば、その商品を出荷した人も注意するようになるから」という丹羽さん。これまでの内外への毅然とした対応の結果、部会の発足当初から部会員の人数も出荷量も変わらずに推移しながら、品質は向上しているということでした。

## 地域活動も積極的に参加

大治町で育つ子供に、大治町で採れるものがどんなものかを知ってもらいたい、という気持ちから、中学校の体験学習の受入農家になったり、教科書への取材に対応したり、様々な地域活動に貢献しています。今年は町制施行40周年事業にも参加し、収穫体験や収穫物の試食体験なども開催するとのこと。「今の子供たちは、畑で育つ野菜を見ても、何の野菜か分からない子供が多い。そんな子たちに自分が食べるものがどうやって作られているのか知ってほしい。」と穏やかな笑顔で語ってくれました。大治町は名古屋市近郊で市街化が進む地域ではありますが、今後も「食」と「農」と地域の「人」とをつなぐ役割を担ってくれることと期待しています。



大治町内の小学校で使われている教科書に掲載



町制施行40周年事業用のモロヘイヤ畑

執筆：農業経営課

取材協力：海部農林水産事務所農業改良普及課